

第20号

山の談話室

好山好山旅会

好山好山旅会 創立 30周年記念号



山の談話室 第20号 目次

	頁
1 私と山との関わり 大田 雅巳	1
2 好山好山旅会と好山好会のこと 好山好会長 徳永 亮輔 . .	2
3 好山好山旅会あつての私 八木 元一	4
4 好山好山旅会の思い出 堀内 宗美	6
5 昔の山歩き 土方 幸一	8
6 北海道の沢 白井 裕	9
7 岐阜県 野伏カ岳報告 高柳 正敏	11
8 クロユリの花咲く白山に登る 魚津 信夫	13
9 北海道大雪山縦走 清水 ふじえ	16
10 三岩岳・窓明山 池田 美保子	18
11 富士登山 村上 颯	21
12 俳句「木曽路にて 二月」及びイラスト 広瀬 爽生子 . . .	22
13 中国タークーニャン登山旅行後記 梅澤 京子	23
14 私の趣味と今思うこと 濱田 和広	26
15 再録 百名山の岩石と成り立ち(1) 高橋 和行	28
新入会員 紹介	30
編集後記	32

表紙のイラスト画は野口元会長（故人）の作品です。
裏表紙の写真は平成23年4月撮影のカタクリです。

私と山との関わり

大田 雅巳

私が好山好山旅会に入会してちょうど20年目である。当会が発足してから30年、いずれも節目の年である。入会のきっかけは、幸か不幸か私の単身赴任である。単身赴任で少し自由になった時間を過ごすため、昔から時々やっていた山登りをすることにした。最初は一人で登っていたが、山で事故が起きた時に単独では危ないと思い、山の会に入ろうと考えた。早速、専門誌で幾つか見つけ、入会案内を取り寄せた中では、一番束縛の少なかった当会に入会した。20年も同じ会で活動が続けているということ

は、やはり会員仲間やリーダーの雰囲気がいかにかなと感じている。そんな私も最初は趣味を絞りきれずに他にもテニスや海釣りなどもやっていた。それで最初の2年くらいは参加回数も年に2回程度だった。そのうちに、当時の会の先輩から「余り山に来ないと忘れられてしまうよ」と柔らかく釘を刺され、山に絞ることにした。会の山行では一人で行くより、効率的で費用も安く、安全・安心と考えている。これからも体力が続く間は山を続けていたいと思っている。

< 思い出のアルバム >



1993年12月12日
納会山行「破風山」
前列のお二人は
現在もご活躍。
村上さんは写っているが大田さんは
何処？ カメラマンかな。

1994 年 8 月 14 日

裏銀座コース縦走山行
後列に、大田、魚津、村上、
吉田（一）さん。



1992 年 5 月 24 日
山ガールのはしりかな。

好山好山旅会と好山好会のこと

好山好会長 徳永 亮輔

好山好山旅会の皆様 30 周年記念ま
ことにおめでとうございます。東日本大
震災の復興の中での 30 周年となり、正
に多くの困難と危機を乗り越えて来ら
れたこと、感慨もひとしおかと存じます。

さて、貴会 30 周年記念に際し秋葉会
長の思い出話そして当会とのかかわり
についてのご依頼があり、私が担当させ
ていただくこととなり、少し綴らせてい
ただくこととします。

好山好会は昭和32年4月に秋葉会長によって設立されました。横有恒隊長の下、日本隊がマナスル初登頂した翌年に当たります。この頃戦後復興が少し整い、多くの山の会が発足したと先輩から聞き及んだことがあります。

私は好山好会へ昭和48年5月に入会致しました。秋葉会長は大蔵省を昭和52年頃に退職されており、その後東京方面で大蔵省の関係会社にお勤めされていまして、余り秋葉会長とは山行をお供出来ませんでした。

それでも当時夏には大阪府山岳連盟の夏の集い、年末には会の納山祭がありました。その折には必ずご出席をされ、他会の会長さんと談笑されていたのを覚えています。

年末の納山祭は、宝塚の蓬莱峡や有馬に近い船坂谷などで行われました。当会だけの行事でありましたから我々は夜遅くまで飲んでいましたが、会長は酒断することなく(好山好会山旅会でもご同様だったそうですね)、少し早めに立ち上がり冬用天幕の一番奥に陣取って、シュラフに入ったり朝まで起きることなく、ぐっすりと就寝しておられました。

我々の年齢から行くとその当時、会長は親爺みtainな存在でありました。会長を囲んで飲んでいましてなんとなく安心感があり、少々羽目を外こともありました。

しかし、度が過ぎると時折カミナリを落とされていました。その時ぐらいが、

素を出されたかなと思う程度で、他には滅多に有りませんでした。

一方会の運営のことに關しては強い意思で突き進められていることが若い我々には良く理解が出来ました。早くから大所帯(時には350名に達しておりました)に対する事業部門制を導入され、部門別での多くのリーダーを上手く育てられました。そのお蔭で当会は今も多くの会員が在籍し多くの仲間が活動をさせていただいております。

秋葉会長は大局的に物事を見られていましたので、会員個々の事柄に關しては、感知されていませんでした。その当時若い会員が多く在籍していましたので、多くのカップルが誕生いたしました。多分仲人のお願いがあったと思うのですが、されたことを聞きませんでした。又結婚式のご出席をされたことも余り聞きませんでした。これは感知しないと言うことよりも、むしろ会員全員が大切な仲間であって偏ってはいけなないと思いがあったのかも知れませんね。

好山好山旅会と好山好会とのかかわりは、やはり会長が大蔵省を退職されてからがきっかけになっているように思います。昭和55年10月3日当会の常任運営委員長職會議において東京支部の新設が決定され、支部長には秋葉会長が兼任と言うことになりました。これより好山好山旅会と命名されるまで好山好会の東京支部として産声を上げました。

早速その年の12月に第 部主管好山好会東京として“東京第一例会”那須連峰縦走が一番目の例会となりました。因みに翌昭和56年には当会会報誌が好山好会月報から木雞と変わることで、会長はこの木雞には大きな思い入れがあたりだったようです。

6月号では東京支部最初の例会報告文“1月11日伊豆ヶ岳～子の権現”コースが載り報告文とともに参加者“秋葉勝市、加山静一と記されています。その後東京支部の例会は毎月3～5例会を計画予定を秋葉会長が毎月2～3の例会を担当され、コースや日程から察しますと、その情熱がひしひしと伝わってまいります。

支部となって4年と2ヶ月目で好山好会の会長職を退かれ名誉会長に就任され、それとともに独立した“好山好山旅会”として60年1月に設立されました。

ここに好山好山旅会が誕生し、会員各位のご協力とご情熱で今日に至るまで輝かしき活動を続けて来られた結果が30周年に繋がったこと、多いに自慢されますように。

文末にあたり、これからも貴会の益々のご発展を祈念いたしつつ、稚拙な文をご報告とさせていただきます。



平成12年5月 大菩薩嶺
好山好会との合同山行

好山好山旅会あつての私

八木 元一

好山好山旅会に入会し、初めて会員の方と御一緒した山が群馬県の裏妙義でした。平成8年10月27日実施の山行です。リーダーが高柳さんで14名の方が参加していました。参加者は男性、女性が半々で、当時はどの山行にしても男

性の参加者が多かったようですね。その記念すべき山行から15年近く歳月が流れ、振り返ってみると当時の参加者で私も含めて4名の方が現在も在籍しています。いろいろな事情から退会していく方、そして一方では新しい会員が入会

し、その移り変わりの中で好山好山旅会が引き継がれ、このたび目出度く創立30周年を迎えることになりました。私も創立30周年の半ばを在籍したという節目で立ち合ったことに感慨もひとしおです。

さて、ここから私事になりますが、山を定期的にかつ継続的に登るようになったのは昭和64年頃からでした。勤め先がらみの知り合いからハケ岳に登ろうと誘われ、その事をきっかけにして飛躍的に山に行く回数が増えました。その予兆はまったく無かった訳ではなく、ずっと以前から山には興味を抱き、それまでもほんの僅かですが、友達や家族などと金峰山、丹沢の塔ノ岳、北アルプスの白馬岳、奥多摩、奥武蔵などの山を単発的に登っていました。いつも山に登りたいという意欲は満々だったのですが、思い立ってもすぐに同行する仲間が居るわけではなく、だからといって一人で登る勇気などましてや無く、当時は想像の世界で山を思い描いているだけでした。それがハケ岳以来から仲間数人がいつも同行するというパターンが出来上がり、月に一回程度で継続的に山に行くことが3年間は続いていたのでしょうか。

その間に北アルプスの穂高、槍ヶ岳にも登り、南アルプスでは仙丈ヶ岳、それから奥秩父の甲武信岳、雲取山、両神山などを踏破し、この先ますます盛んになるといったところでした。ところが、その矢先にリーダー格の方が病魔に冒

され、楽しみにしていた月一回の山行も頓座する事態に陥りました。シャクナゲの咲く季節を迎えていた甲武信山が仲間全員と行った最後の山行でした。平成3年5月の事です。その後も残った仲間と示し合わせて取るに足りない山を二回ほど登り、そのうちにリーダー格の方が病氣も回復せずに亡くなって、寄せ集めにすぎないグループは結局瓦解するに至りました。

以後、山に行かれない日々を悶々として過ごし、しかし、その間でもまったく山に行かなかった訳ではなく、奥武蔵や奥多摩の山などを思い出したように単独で登っていました。登る山はいずれも低山ですし、従って登るのはいつも新緑紅葉の頃と決まっていました。雪を抱く真夏の高山は夢を馳せるばかりで、そんな鬱積がたまりにたまって思い余った結果が好山好山旅会との出会いでした。

当然のことながら「山と渓谷」で知ったのですね。今では好山好山旅会のどこに興味を惹かれて入会したのか忘れましたが、しかし、これはとどのつまりは縁ということでしょうか、言いようがありません。好山好山旅会に入会したお陰で北アルプス、南アルプスの高い峰々も登ることもでき、また東北、四国、近畿などの山にも気軽に足を延ばし、それにも増した大きな喜びは何よりも山仲間とのつながりを持てたからでしょうか。先達のお陰で山野草を知り、樹を知り、各地の知らなかった山を知り、その事に

よって山に対する興味が広がって知識はさらに深化し、私自身もこれから歩ける間は声を大にして趣味は山であると言い切れるような気がします。

私にとって好山好山旅会の皆様から、

このようにひとかたならず恩恵をこうむっているばかりの一会員でしかなく、この機会に厚く御礼を申し上げるとともに好山好山旅会の今後の発展を祈願してやみません。



四季の山便り、あるいは四季折々に歩いた山の感想を気の向くまま書きとめました。***



八木さんのブログやホームページ は人気があり閲覧数も多い。

ブログは「ホットな山紀行」HPは「四季の山便り」です。

好山好山旅会の思い出

堀内 宗美

好山好山旅会には、平成8年9月から23年12月まで、約14年在籍した。過ぎてみれば、本当に長い年月ご厄介になった。

最初は8年9月1日で、魚津さんがリーダーの石裂山だった。断崖をロープ一本で降りるのには、肝を潰した。それに

なかなか足が早い。

最後は、22年12月12日の忘年山行で、この時は、私の鈍足の影響で登頂出来ず、気の毒をした。

思い出は、いろいろあるが、やはり先ず宿泊山行を挙げたい。

栗原さんリーダーの鳳凰三山縦走は、

若い時に北岳登山で遭難した時の現場らしき所を通った。そこで高山植物と雷鳥に出逢えた。(参考：山の談話室2号記載)

18年4月の大田さんリーダーの新潟角田山も下山途中の尾根から、真っ青の日本海を眺められたのは幸いだった。15年6月の粟が岳(八木リーダー)の姫ユリの群生も印象的。

14年6月のつつじの櫛形、甘利山(国府田リーダー)の時は、前夜泊で、広瀬さんの山梨宅にご厄介になったが、お孫さんの活発かつ可愛いのは、大笑いした。

実質的に最後の山行となった平成22年1月の鷹取山(清水リーダー)。帰途にめずらしく生麦のビール工場を見学、試飲とアフターの団欒で大いに盛り上がり楽しかった。

私は鈍足で、下りが苦手。必ず私の後には一人ついたような状態だった。その点、優しかった女性群やリーダーさんにはご厄介になり感謝しています。

私は、走ることも好きで、今もって、各所のレースに出ている。どうして、山登りは、駄目なのか、文献で調べて、納得した。

長距離ランニングに必要なのは、筋力、持久力、速度である。登山は筋力、持久力とバランス感覚と言う。これらの経年低下をみると、20歳代の最高値に比し筋力、持久力、速度は60歳代でも、何割かのダウンだが、バランス感覚は何分の

一になると言う。

それに私は50歳のときに、突発性難聴を患い、平衡感覚は自信が無い

原因は分かった。登よりも、下りの方が苦手のことも理解できた。下りではバランス感覚が重要で、筋肉の列断(肉離れ)も起こりやすいとゆう。

これらのことは、山の談話室に一部報告した。(17巻)。

山の談話室にも、大変ご厄介になった。終戦直後の中学時代の白馬登山録(13巻)、伊勢湾台風時の南ア遭難断片(2巻)、中学、高校時代の剛健旅行の思い出(14巻)などは、書き残せてよかった。

南アと剛健旅行は小学校以来の親友と同行したものだが、その友も今はいない。この2冊は遺族の方にお送りした。

今、私は、登山は辞めて、ランニングと写真、野菜作りなどを楽しんでいる。

思えば、四方山に囲まれた山梨で育ち、山は仕事に行く所といわれていた。しかし山へはいつも行きたかった。それが定年後、栗原さんのご紹介で好山好山旅会のご厄介になり、いろいろの山へ皆さんと行けた。たいへん有難いことと思っています。その間なんのご協力も出来なかったことをお詫びいたします。

最後に好山好山旅会のますますの御発展と皆様のご健康をお祈りいたします。

昔の山歩き

土方 幸一

若い頃の登山は、いつも夜間登山で夜7時に出発して懐中電灯だけで夜中の12時まで歩き途中でビバークして夜明けを待ちまた登るという無謀なものでした。だいたいが単独行で、私の辞書には遭難の文字はないなどと馬鹿な信念で登っておりまして。

南アルプスの聖岳に登った時でした。予報では台風が接近しているとの事でしたが上陸する前には下山できるだろうと考え強行しました。コースは聖沢沿いのコースで一気に聖平まで登るもので、出発からしばらくは順調でしたが、2時間ほど歩いたところで懐中電灯が点灯しなくなりました。

月も出ていなかったので自分の手が見えないほどの真っ暗闇です。しかたなく、ここでビバーク。まったくの孤独。そのうちに当時はやっていたエクソシストという映画のシーンが頭の中によみがえり始め、あの悪魔が出てきたらどうしようと考えていたら一睡もできないまま夜明けを迎えました。

翌日は台風の影響で今にも降り出しそうな天気です。雨が降る前に何とか聖平小屋まで行こうと死に物狂いで歩きました。小屋に着くと、雨が降りだし風も強くなって来ました。登山客は台風が

来るので全員下山していて、小屋には私一人だけです。山小屋は広くていいななどと呑気に考えていたら台風上陸で山は大荒れ。

トイレに行くにも都度雨具をつけて行かなくてはならず用足しをしていたら強風でトイレのドアと屋根が吹き飛ばされて用足しが終わる頃にはずぶ濡れになっていました。

2日間小屋に足止めされて3日目に待望の聖岳山頂に立てました。台風の為に聖平小屋には都合3泊して、食料も米と塩だけになってしまいました。この米で2食分のおにぎりを作り上河内岳、横窪沢小屋を経由して畑薙湖へ約7時間かけ下山しましたがここからがたいへんです。

登山口である聖沢に車を置いてある



為、4時間近く歩かなくてははいけません。バスもタクシーも公衆電話も食料もありません。水筒に沢水をいれてひたすら歩くだけです。山に入ってからここまで4日間のあいだ誰とも会いませんでした。

35年近く前の山の思い出ですが、当

時の南アルプス南部は8月のお盆を過ぎると小屋の管理人は山を降りてしまい、登山客も少くなり静かな山旅をするにはもってこいの山域でした。もともと交通の便が悪いため登山客は少なかったのですが夏場で4日間誰とも会わない山旅など今では考えられない事です。



北海道の沢

白井 裕

沢登りの魅力についてその清涼感や冒険的な楽しみを挙げる人が多い。ロッククライミングと同様にヘルメットを被り、ザイルを担いで歩く。バランスと腕力が要求され尾根歩きよりも複雑でリスクが大きい事は確かであるが、最高に魅力的な山行形態であることも確かである。

昔北海道の山を歩き回っていた頃、夏は沢から頂上を目指す事も年に数回あった。前述の様な魅力も勿論だが、飲水の水の心配が無い、食材が現地調達可能、焚き火が出来る楽しみ。これらにより装備が軽減出来る事は大きな魅力だった。食材とは魚と山菜。本州の様に釣り人が山奥まで入り込まない為、魚も人慣れしていないので釣り針と糸を持参し、石の裏に居る虫を着けて糸を垂らせば、イワナ(白い斑点を持つアメマスが赤い斑点を持つオショロコマ)が素人でも釣れる。

この2種類のイワナは同じ流域でも沢毎にきちんと棲み分けがされている。山菜はアイヌネギ(行者ニンニク)、ミツバ、ミズ、別名山アスパラといわれるシオデなど。イワナは沢山取れたら焼き干しや燻製にすれば、山行中持ち歩ける。焚き火は調理に使うのはもちろんだが、火を見つめながら飲む酒の美味さは格別であり、クマも寄ってこない。

日高山脈は北アルプスの様な岩稜の連なりとはまた違った峻厳な山並みが南北150キロに及び、今でも北日高の幌尻岳、中部日高のペテガリ岳、南日高の楽古岳以外は登山道が整備されておらず、沢から源頭(多くはカール)に出てピークに立ち、稜線に踏み跡が無い山域では、また沢を下り次のピークを目指して別の沢を登る事を繰り返すしか手段が無い。アプローチがうんざりするほど長い上にこの様な環境であり大雪山

の様に本州からのツアー登山者も来ないので、現在でも以前と変わらぬ原始の姿を留めているそうだ。但し、雨が降るとエスケープルートとなる登山道が無いので沢の水が減るまでじっと待つしか無く、この場合テン場の選定は命を左右する。急峻な日高の沢は雨が降ると急激に増水し鉄砲水となる。昨年も東京理科大のパーティー4人が流され3人が亡くなった。天候に恵まれれば快適この上ないのだが停滞の予備日を考慮し縦走には最低1週間は必要。時間と体力が有る学生向きだ。

憧れのカムイエクウチカウシ、神威岳ともに日本200名山の一つで前者は札内川8の沢から大学3年時に挑戦したがパーティーの1名が函(川の中で、両岸が岩で囲まれた所)の高巻きを失敗、転落負傷し途中断念した。(道警のヘリが救助出勤し多くの方に迷惑を掛け、部は半年間活動禁止となり、このコースを試みる後輩もその後出ていない。)カムイエクウチカウシは永遠に憧れの山となった。

麓のバスの終点から延々と林道を歩き、時折通る営林署の車や造材のトラックに乗せてもらいながら登り口へ至り、帰りも乗せてくれる車が通るまで歩き続ける。時には造材飯場に泊めてもらいご飯を食べさせて貰う事も。(飯場ではおかずのほかには大鍋で豚汁が出される。毎日具が無くなった分足し続けるのでうまみが凝縮されて本当に美味かつ

た。)頂上に立てた感激だけでなく様々な記憶が散りばめられている日高は学生時代を通じて最も印象深い山域であった。

大雪山系では、北海道で一番美しい川と言われ「滝の瀬一三丁」と呼ばれる沢幅15m程で2キロ余り続く滑床と5つの大きな滝を持つカウナイ川からトムラウシ山へのコースが圧巻だ。大雪と十勝連峰が接続する位置にあるトムラウシは、大昔盛んに噴火をしていた火山であり、流れ出した溶岩が長大な斜面を創った。カウナイはこの斜面が長い年月で浸食を受けて出来た谷である。苔が付着している安山岩の一枚岩をくるぶしの少し上位の水が流れ、わらじ(当時は沢歩きには地下足袋を履きわらじをつけた。現在はフェルト底の沢靴)を通して伝わる苔の感触も良く快適そのものの。



魚止めの滝より下流ではイワナ(この沢はオショロコマ。アメマスより匂いが強い)も良く釣れる。増水が無ければ、途中さほど難しい箇所は無く最上部も藪こぎをせずにヒサゴ沼とトムラウシの間(通称日本庭園)の花の群落に覆われた源頭に出る。表大雪や十勝連峰から目指す遥かなる山「トムラウシ」とは違った魅力的なアプローチであり、定年後に体力とお金?が残っていれば、もう一度歩きたい北海道の沢の筆頭に挙げられる。

温かい布団と食事が提供され、冷たいビールの自販機も並ぶ快適な山小屋泊の山行の対極に、自給自足に近い登山が出来る貴重な山域は、開発の手を入れずに後々まで原始の姿を残して欲しいものだ。



岐阜県 野伏カ岳(のぶせがたけ)報告

高柳 正敏

<平成23年4月>

宿を車で5時50分出発する。30分ほど走り白山中居神社下に着き、身支度をして6時半に歩き始めた。眼下に流れる石徹白(いとしろ)川まで下りて対岸へ「だいしん橋」を渡る。これから行く和田牧場への林道は途中までは除雪はされている。林道は電光型に登っているので上に林道が見えたらショートカットする。山腹の積雪は50センチほど有り、ときには太腿までもぐる。

ショートカットを繰り返し緩やかに登っていく、樹林帯を抜けると目の前に雪原が広がった。ここが和田牧場跡で現在は使われていない。時間は7時35分。

牧場の雪原、左上にこれから登る野伏カ岳が見えるが稜線付近には雲が掛かっていた。今日の天気は午後から時々雨の予報が出ている、空はその用意をしているのが稜線を雲で覆っていた。



私は雨男。地形図を見ると大きな湿原を西へ横切る、湿原は雪で覆われているのでその上を歩き、渡り終わったならそのまま急斜面を10分ほど登るとそこが「ダイレクト尾根」である。無雪期には1メートルほどのヤブがあり、登るのは不可能なため積雪期にしか登れない。この尾根の上が山頂であるがかなりの急登である。登りながら見える頂上は山頂ではなく、その奥に頂上がある。

尾根上はさすがに風が強く雨具を着ける、ズボンとスパッツは宿で付けてきた。少し雨もばらついてきた。頂上手前30分ほど前からミゾレになった。ミゾレを含んだ強風は顔に突き刺さるようで吹雪より始末が悪い。残雪期の悪天候は雨またはミゾレは承知してはいる。この時期は干、雨、ミゾレによる低体温症が以外と多いのである。雪用のヤッケより雨具が良い。

ときどき体が飛ばされそうになり耐風姿勢をとる。なんとか頭頂部についたが頂上が分からない、看板はないと聞いていたが何か印しがないかと、ガスの中目を凝らすと赤い布が付いた2メート

ルほどのポールが立っていた。頂上である、1674メートル、時間は10時15分、所要時間は3時間45分、標高差約900メートルか。

下りは同じ道を戻るのが登ってきた道はかなり急で、初心者には怖いかもしれない。雪山に慣れた岳人であれば楽しいバックステップである。下って来たダイレクト尾根の末端部分は雪が雨を含みシャーベット状になっていてズボズボともぐる。ワカンを付けようか迷うがアイゼンで下ることにした。

風も無い和田牧場跡の広大な雪原をとぼとぼ歩き、小降りになった雨の中、樹林帯をもくもくと歩き下山した。強風と雨、ミゾレの中、ガスで何も見えない山頂、なにを楽しみとして登ったのか、やはり、それはそこが野伏カ岳だった、からにはほかならない。



<コースタイム>

宿5:50 登山口6:25~6:30 和田牧場跡7:35~7:40 ダイレクト尾根取付き8:10 野伏カ岳10:15~10:30 和田牧場跡11:40~11:50 登山口12:50

<2.5万地形図>

「二ノ峰」「石徹白(いとしろ)」「願教寺山(がんきょうじさん)」

■東京から現地への行き方

東京駅 → 名古屋駅 → 美濃太田駅 → 美濃白鳥駅 → 宿「カルヴィライとしろ」
所用時間約5時間

中央高速/松本 → 安房峠 → 高山 → 東海北陸道 → 郡上八幡 → 美濃白鳥 →
宿「カルヴィライとしろ」所用時間約7時間（4月5月は安房峠の積雪に注意）

東名高速/名古屋 → 東海北陸道 → 郡上八幡 → 美濃白鳥 → 宿「カルヴィライ
としろ」所用時間約7時間



クロユリの花咲く白山に登る

<平成22年7月>

魚津 信夫

日本の三名山は富士山・立山・白山と言われ、信仰の対象になっています。富士山、立山には登っていますので、残っていた白山にクロユリの群生地を見に平成21年の夏に行きました。

私の父は能登半島の生まれです。子供時代白い白山を見て育ったはずですが。白山の頂上から、その能登半島を見たいとも思いました。

白山室堂について調べますと、7月末から8月初は登山者で大変混雑し、予約制のため宿泊を断られるそうです。特に週末は避けるようにとありましたので、7月21日（火）からの2泊3日で計画を立てました。梅雨が遅れて、雨、ときどき曇りの予報でしたので、雨中登山を覚悟して準備しました。

7月21日、特急はくたかは雨の中を走りました。魚津、富山付近では横なぐりの凄い雨になりました。川は増水し、

田は冠水し、消防団の人や農家の人が見張りをしていました。金沢に到着、兼六園、金沢城跡等を傘をさしながら見物しました。ホテルのTVでは、九州北部や山口県での豪雨による被害状況が放映されていました。

22日朝、幸運にも雨は止んでいました。5時30分金沢駅発のバスに乗りました。発車して間もなく、運転手が「県から通知がありました。昨夜の大雨で、市の瀬・別当出合間が通行出来ません。場合によっては販売したキップは払い戻しになります。」と言いました。今回は登れないのかと不安になりました。

市の瀬のバス停でトイレ休憩、時間が来ても出発しません。30分以上待って、ようやく出発OKの連絡があり、バスは動き始めました。数箇所で作業者が数人づつ、道路上に流れ出した土砂をスコップで取り除いています。山側の斜面から

は所々、水が道路に流れ落ちています。昨夜の豪雨の様子が想像出来ました。

バスは別当出合に到着、上りのコースは比較的ゆるやかな砂防新道にしました。先ず、長い吊橋を渡ります。登山道には水が流れています。朝までの雨のせいでしょう。立派なオオウバユリの群生地がありました。一本の茎に12ケもの花が咲いていました。こんなに花の数の多いウバユリは初めて見ました。

右の方から凄い轟音が聞こえて来ました、高い山の上から4段の滝が連なり、その下の方では7段にもなる砂防ダムを大量の水が乗り越えているためです。ギボウシ、ヤマアジサイの花が咲いていました。左の方からも砂防ダムを乗り越える凄い水音が聞こえます。登山道では植生改良区と書いた古い登山道が平行して時々現れます。雪解け水や大雨で道路が破壊され、その都度改修している苦労の度合いが理解出来ます。

甚之助避難小屋に到着しました。ボランティアの若い男女がトイレ掃除をしていました。白山では色々な所でボランティアの助けが有りました。有り難いことです。更に進みますと、所々に水溜りがあり、その上の木にはモリアオガエルの巣がぶら下がっていました。キンボウゲ、ヨツバシオガマの花が咲いています。ハクサンフウロ、クルマユリ、キヌガサソウ、マルバダケブキ、ダイモンジソウ、ミヤマキンバイ、コバイケイソウ等花が多くなって来ました。

霊峰白山延命水に到着、つめたくて非常に美味でした。黒ボコ岩に到着、室堂迄0.5kmです。左側に雪渓を見、イワカガミ、コバイケイソウ、チングルマ、マイズルソウ、ゴゼンタチバナ等の花を見ながら進み、岩山に登ると室堂が見えて来ました。

室堂で宿泊の手続きをし、食堂でラーメンを食べてから頂上に向かいました。延々と石の階段が続きます。クロユリ、キンボウゲ、イワギキョウ、ツメクサ等を見ながら、ゆっくりと登りました。頂上(御前峰)に到着しましたが、一面のガスで展望はゼロ、残念ながら能登半島も見えません。

下りはお池めぐりコースにしました。青色の紺屋ヶ池、油ヶ池、赤色の血の池、千蛇ヶ池等の池を巡りながら、ハクサンコザクラ、ハクサンシャクナゲ、ミヤマダイコンソウ、クロユリ等のお花畑を見たり、万年雪を踏んだり、変化に富んだコースでした。

室堂のセンターの前には祈祷殿があり、大勢の坊さんが並んで拜んでいました。登山者にも参加の呼びかけがありましたので、一緒にお参りをしました。永平寺の修行僧だそうです。毎年、希望者を募り、登山と修行をするとの事。今回は60人の参加で、今年は3回の予定と聞きました。食事が終わってからも、食堂の隣でお祈りが始まり、これにも参加しました。

御嶽山や月山等では白衣を着て、六根

清浄を唱えながら登る姿を見ますが、白山には永平寺のお坊さん以外は見かけませんでした。白山は越前の僧「泰澄」が初めて登って修行したのが、信仰登山の始まりと伝えられています。宗派が他の山と違うのでしょうか。山伏は白山に登れないのでしょうか。

約30分の植物観察の案内が有り、参加しました。植物に詳しいボランティアが交代で山に登り、説明してくれているようです。白山には500種もの高山植物が生育しており、ハクサンの名の付いた植物は20数種あると言っていました。イヌワシとカモシカがいるそうですが、特にイヌワシは自然の豊かさを示しているそうです。クロユリは、祈禱所の後ろの地区に柵を作ったりして保護されています。クロユリは種から7年目にオバナだけの花が咲くそうです。そして数年後にオバナとメバナの付いた花が咲き、その後花が2ケになり、繁殖すると言っていました。カタクリに寿命が有りますので、クロユリの寿命を質問しましたが、分からないとの事でした。

晴れてご来光が出来る日には、放送で知らせると聞いて休みました。早朝、放送が有りました。懐中電灯を点けての出発です。頂上では大勢の登山者が太陽の方向に向かって立ったり、座ったりしています。永平寺のお坊さんたちも、長い立派な杖を立てた指導者を先頭に並んでいます。白山神社の神主さんが白山の自然や歴史等を、大きな声で説明してい

ます。あいにく、山は雲に覆われていますので、太陽が顔を出すのが遅れています。神主さんの説明は続きます。雲の上から太陽が顔を出しました。神主さんの音頭で万歳三唱・・・感動の瞬間でした。しかし、目的の能登半島は雲の下で見えませんでした。残念です。

ボランティアの案内でのお池巡りがありましたが、前日、歩いているので室堂に直接下りることにしました。帰りのコースは花畑の面積が一番の観光新道です。広いお花畑が続きます。写真を撮りながら下りました。馬の立髪、殿ヶ池避難小屋を経て仙人窟付近のお花畑で休憩しました。ここから下ること約30分、カメラを忘れたことに気が付きました。急いで休憩していた所に戻りましたが、カメラは有りません。近くで休んでいる人が、さっき下りていった人が管理事務所に届けると持って行ったと言います。

有難うと言って下り始めました。急な段々の下り坂が長いこと続きました。ようやく別当出合の管理事務所に到着、管理人にカメラの件を聞きましたが、届いていないとの返事でした。市の瀬、室堂の管理事務所にも聞いてくれましたが、届いていませんでした。氏名、電話番号を話して、届いたら連絡をと依頼して帰って来ましたが、連絡が有りませんので、時代遅れのバカチョンカメラでも欲しい人がいたようです。

本報告にクロユリの花やお花畑の様

子をご紹介しなかったのですが、残念ながら写真は紛失してしまいました。申し訳ありません。

目的のクロユリの花は沢山見ることが出来ました。しかし、あまり目立たない花ですね。天気が良かったのに、能登半島が見えなかったのは心残りです。



<コースタイム>

1日目 別当出合(8:10 歩) 甚之助避難小屋(10:05~10:10) 室堂(12:00~12:50)
御前峰(13:40~13:50) 池めぐりをして室堂(15:30)

2日目 室堂(4:00 歩) 御前峰(4:40~5:20) 室堂(5:50~7:40) 殿ヶ池避難小屋(8:35) 別当出合(10:40~11:30 バス発)



北海道大雪山縦走(トムラウシ山を目指して)

清水 ふじえ

平成21年春頃、梅沢さんから、大雪に行かない? 計画してくれる? って言われて、丁度9月に大連休があるので、この時に行くことに決まった。

私にとっては、初めての北海道山行、でもやっぱり縦走したい。なかなか休暇も取れないので思いきって、大雪からトムラウシまでの大縦走計画を立てることにした。

早速メンバーを決めて、5月の連休頃に、旭川行きのエアーチケットを購入した。最後まで、黒岳から登るか、朝日岳から登るか悩んだが、荷物が重いので、

少しでもコースが短い方が楽だということで、層雲峡から、黒岳に登るコースにした。

ほとんど計画が出来た21年7月、あの、悲惨なトムラウシ大遭難事故が起こった。

お天気が悪くなれば、9月でも雪や雲の可能性があると自覚し、お天気と相談して、もし天候が悪ければ、コースを変えて、安全第一に考えて常に行動することをメンバーと確認しあい、家族の非難も多少あったかもしれないが、メンバー5人、予定通り行くことになった。

9月18日、午後のJAL便で、羽田から、旭川空港へ。旭川空港では、予約していたガスカートリッジを受け取り、ジャンボタクシーで層雲峡の朝陽亭へ。

19日、黒岳ロープウェイ、リフトと乗り継ぎ、黒岳への登りが始まる。黒岳石室で北海岳の方に向かう。途中霧雨になり、雨具を着ける。霧が立ち込めて、目の前が真っ白になるが、程なく雨も止み、周りの景色も見えてくる。

北海岳からは、白雲岳を目指すが、頂上には登らず、回りこんで、今日の宿泊地、白雲岳避難小屋に向かう。小屋には小屋番さんがいて、4名は指定されたところにシュラフをひいて小屋に泊まり、早川さんは、下のキャンプ場で、テント泊。

20日、朝からお天気が良く、小屋から、トムラウシ山が可愛く小さな冠のように見える。まだまだトムラウシ山は、かなり遠い。

白雲岳避難小屋から少し下ると、緑の中に紅の混じった素晴らしい紅葉に映えた谷が見えてくる。この辺りからは、



ひたすら平で長い道で、大陸の高地の大草原を思わせる広大な景色だ。行く手には忠別岳が、見えてくる。

忠別沼を過ぎ、忠別岳に登ると、トムラウシ山がだんだんと大きく見えてくる。五色岳分岐を右に行き、化雲岳から下って行くと今夜の宿、ヒサゴ沼が見えてきた。



ヒサゴ沼避難小屋は満杯で、2人がどうにか小屋の隙間に入りこみ、私と梅沢さんは、早川さんのテントに2人で、入った。早川さんは、私のテントで、1人泊まることになった。風が強いが、どうにか眠れて、朝には多少風も治まった。

左側に大きな石狩岳がそびえているのが見えた。

21日、今日は、登山最終日だ。トムラウシ山に登り、国民宿舎東大雪荘に向かう、一番歩行時間が長い日だ。

お天気は、今日も晴れていて、絶好の登山日和。ヒサゴ沼から登って行くと、大きな石がごろごろして歩きにくい岩場に出た。さらに登ると残雪が多く残る急登が待っていた。さらに歩を進めると、

日本庭園と地図に書いてある、いろんな石のオブジェが並んでいるところをとり、北沼に出た。



あの7月の遭難の時には水が溢れていたと聞いたが、今日は、穏やかに適度な水を蓄えている静かな沼だった。ナキウサギが可愛い声で鳴いているが、姿は見えない。

北沼からは急登で、あっという間にトムラウシの頂上に着いた。風が少し強いが、十勝岳方面の展望が素晴らしかった。

下りは、トムラウシ温泉に向かうが、距離が長い。途中コマドリ沢のみごとな紅葉を見たり、怪我をした他のグループの人がヘリコプターで救助されるのを

見学したりで、時間を取られたようで、トムラウシ温泉コース分岐から半分ぐらいのところで、日が暮れてしまった。ライトの明かりを頼りに、ゆっくり気をつけて歩いて、やっと大雪荘の明かりが見えた時には、ホッとしたのと、大縦走を無事に成し遂げた感激で、胸に迫るものがあった。

22日タクシーで、新得に出た。ここから電車で富良野に向かい、富良野からはレンタカーで、美瑛のペンションに行き、ここで一泊。ゆっくりと山旅の疲れを癒した。

23日朝の飛行機で、旭川を後にして、東京に戻った。

王冠の山トムラウシ山は、大雪山から、トムラウシ温泉からも距離の長い行程を歩く必要があり、容易いには登れない大変な山であるが、それだけに登り終わった時には、感慨も大きな山だと思った。悪い天気が続けば、8月以外は、凍える気温になる。今回は、いいお天気を貰い、大自然のGodに大感謝！

三岩岳・窓明山 2010年10月16日～17日

池田 美保子

三岩岳と窓明山を知ったのは、ヤマケイの雑誌でした。雑誌によると福島県の

奥会津に位置する三岩岳と窓明山は、近くに百名山で有名な会津駒ヶ岳、尾瀬の

燧ヶ岳があるため、その存在はあまり知られていないが、一帯にはブナ林が広がり奥会津の深山という感じで静かな山行を好む人向きであった。

おりしも紅葉の時期もうこれは行くしかない。行かなければと半ば強引に山仲間にも車をお願いして避難小屋泊まりで行ってきました。

小豆温泉入口駐車場に車を止め道路反対側の登山口の標識を見てスノーシェッドの上に出る。少し高度感があり屋根の上を歩いている不思議な感じがする。少し歩くと右に鉄梯子が現れ樹林の中へと導かれブナの大木が出迎えてくれる。沢沿いに歩き始めて15分ほどで滝が現れ一息いれる。先の黒檜沢合いは水量少なくコンクリートの階段と飛び石で徒歩する。

沢から離れジグザグに登ると見事なブナ林が現れる。この辺りはまだ紅葉していないが木肌が眩しい。さらに高度を上げていくと周りの木々は色付き三岩岳への稜線が見え始める。ガスがかかり始め今日山頂を踏むのは無理かしらと頭を過る。水場を過ぎ緩やかな登山道は今まさに紅葉真っ盛り、旧道との分岐からは下りにとる窓明山が間近に眺められる。山頂に向けてブナの原生林を登り始める。ガスで周りは何も見えないが、下の方から見上げたあの稜線を今登っていると思うとなんだか胸が詰まる。この辺りの紅葉はやや終わり茶褐色に変色し始めているが、林床の小さな木々は

黄色く色付き急坂の尾根でも足取りは軽い。やがてオオシラビソと湿原が現れ足場がぬかるんで来ると目の前にログハウス風の小屋が見えてきた。

オオシラビソに囲まれた深い森の小屋という雰囲気です。小屋には先客が一人、他にもザックが三つ、山頂にでも行っているのだろうか。私達四人は、二階の屋根裏に梯子で登り寝場所を確保した。ガスが出て視界がなく登頂を諦め食事をして明日に備えて早く休むことにした。

翌朝6時過ぎ小屋に荷物をデポして三岩岳山頂に向かう。山頂までの間にいくつかの小湿原を見るが、笹に埋め尽くされ元の姿を留めていない所もあった。雲の切れ間から僅かに青空が見え隠れする。早くすっきりと晴れてほしい。

三岩岳の山頂は狭く標識の向こうに会津駒ヶ岳が稜線上に、ここからすぐにも辿り着ける近さに眺められた。生憎曇っていて遠くの山並みがうっすらと眺められ紅葉していると思われる山の斜面がガスによって覆われていて残念。



小屋に戻り窓明山に向かう。私達の他には誰もいない 静かな稜線歩き、陽が差すと山肌をおおう紅葉が一段と鮮やかに映え、やがて目の前に大きく窓明山（まどあけやま）の優しげな山容と湿原が現れた。赤や黄色、ダテカンパの白に彩られた山の斜面が幾重にも折り重なり素晴らしい眺めです。振り返ると三岩岳は雲に覆われ再び見ることはできなかった。山頂手前の湿原を抜けシラビソの中を行くと分岐が現れ窓明山山頂へと導かれる。

シラビソに囲まれた山頂を後に分岐に戻り刈り払われた緩やかな笹の尾根を下り始める。とても良い雰囲気 で前方に紅葉した木々が見えてくるといよいよ紅葉樹林の中へ突入、見事な紅葉に身体中が黄色く染まりそう。気持ちまで高まり素晴らしい紅葉に「すごい！すごい！」を連発する。

緩やかな下りもそろそろ終わり家向山に向かって登り始める。山頂お通らず尾根を下りますが、紅葉はまだまだ続きここのブナ林が素晴らしかった。曇っていて残念ですが、木肌の白と黄色い葉

笹の緑のコントラストが見事でした。ブナだけでなくカエデ、モミジ、ドウダンツツジ、ハゼなども彩りを添え森全体を染め上げていました。登山道も色とりどりの落ち葉で敷き詰められ上から下まで見事な紅葉に圧倒されました。

1200m位まで下って来ると木々がまだ黄緑色で、高揚していた気持ちが少し落ち着きを取り戻してきたようです。大きな木の裏側に巽沢山の標識を見てここから最後の下りが始まります。だんだん急になり階段状の下りを終えると国道に飛び出しました。登山口の標識はなく車道を歩き駐車場に戻りました。

紅葉のちょうどよい時期でしたが、人も少なく静かで避難小屋から窓明山に続く稜線と美しいブナ林が心に残る山旅になりました。



<コースタイム>

一日目

小豆温泉駐車場 11:15 発 - 黒檜沢出合 11:45—(昼食 0:30) - 旧道分岐 13:33
- 三岩岳避難小屋 15:22 着

二日目

三岩岳避難小屋 6:05 発 - 三岩岳山頂 6:45/7:00 - 三岩岳避難小屋 7:45 - 窓明山 8:50/9:00 - 巽沢山 11:20 - 小豆温泉駐車場 12:15 着

富士登山

村上 穎

一昨年（平成21年）当会の仙丈ヶ岳～三峰岳～塩見岳の縦走に参加したあと、急に富士山に登りたくなった。山を始めて間もなく、富士山に登ってから20年くらい経つだろうか。その時と同じく富士吉田口から登り、須走りを下って御殿場に降りるコースをとった。8合目の小屋に泊り、早朝、山頂を目指した。最近は富士の登山ブームとかで、若い人々も混じって多くの人々で登山道は混雑している。肌の色で一目で分かる外国人や話し声を聞いてそれと分かるアジア系の外国人も多い。山頂近くになると、混雑で登山者の列は前に進まない。ご来光は山頂直下で迎えた。太陽が顔を出す前の一刻一刻変化するオレンジ色の空。感動の一時である。

時計の針周りにお釜巡りをする。快晴。山中湖、河口湖、丹沢山塊、相模湾、駿河湾を俯瞰しながら歩く。やはり富士山は日本一の山だ。小宇宙から日本を見ているようで、気持ちよい。浅間大社奥宮から旧観測所のある剣ヶ峰までの砂の登り坂は距離が短いけど、きつい。フーフーしながらやっとたどり着く。旧観測所脇の展望所に登ると、広大な樹海に色濃く影を落とした、影富士が美しい。

下山は、慎重にゆっくり下る。20年前初めての富士登山で、調子に乗ってスピードで須走りを下り、直ぐに膝を痛めた。朝8時頃から下り始めて午後4時頃ようやく御殿場口に着き、最終バスにやっと間に合ったという苦い経験がある。

一昨年の富士登山が素晴らしかったので、昨年もコースを変え登山した。御殿場口から双子山に登り、宝永遊歩道を経て富士宮口6合目で一泊した。早朝、山頂に登り、富士吉田口に下った。朝、登山途中でご来光を拝めないのが物足りないが（山頂に登ってしまえばいいのだが）、御殿場口～富士宮口間の荒涼とした風景は、普段見る優しい富士とは違った姿を見せていて魅力的なコースでした。

今年もコースを変え、富士登山したいと思っている。

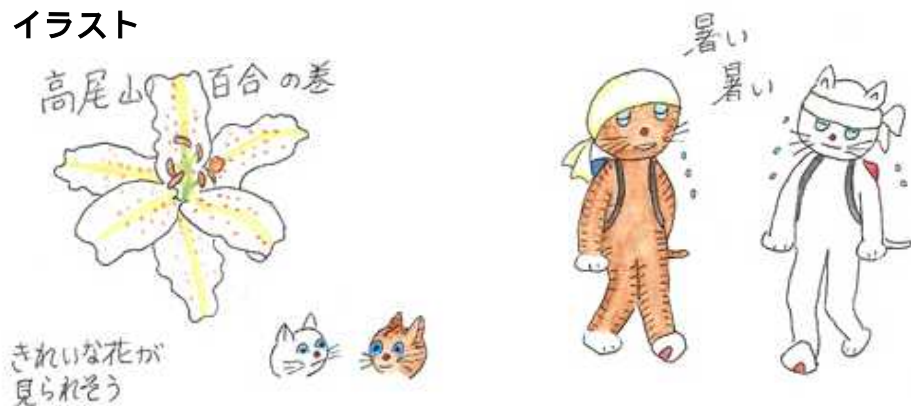


俳句 題「木曽路にて 二月」

ペンネーム 萩 猿子
(広瀬 爽生子)

なに気なく 咲く福寿草 木曽路かな
冬枯れし 千年の栃 何を見る
寒風や 往時をしのぶ 関所跡
薄雪に 格子の映える 宿場町
そばがきも 赤き漆器に 盛られくる
凍てし道 町屋連続 面白く
今静か 古戦場跡 谷の雪
着ぶくれて 出梁造りを 見学す
馬籠宿 いきなりの坂 かじかむ手
風化する 石碑の多く 冬古道
石畳み 人馬踏みしか 枯葉舞う
つらら下げ 水車はまわる 坂の道
駅舎から 真正面に 冬の恵那
名物の 栗の最中に 旅終わる

イラスト





中国タークーニャン登山旅行後記

梅澤 京子

平成20年の7月、計画していた旅行が四川省の大地震(2008/5/12、マグニチュード7.8、死者6万人超)で、道路が復旧しないとのことで、泣く泣く5千円払って航空券をキャンセルした。今回は、リベンジとなる。

平成21年7月6日 格安航空券を使ってアジアナ航空に乗り、ソウル経由で成都へ。成都で32歳の中国人通訳が迎えてくれる。彼が最後まで案内するから安心して下さいと言われた。

7日 黄龍 成都から九寨溝まで飛行機で移動、そこから黄龍まではバスで3時間。黄龍は九寨溝の南の松潘県に位置する総面積700平方キロの峡谷。九寨溝と共に1992年に世界自然遺産に登録

された。石灰岩でできた光沢のある黄色の棚田の連なりが、谷を駆け昇る黄色い龍のように見えることからその名が付けられた。大小様々の棚田状の池にエメラルドグリーンの澄んだ水が溢れ、素晴らしい光景。黄龍の入り口は標高3200m地点に位置し、そこから3800m地点まで風景を見ながら登るのが一般的なコースだが1日で見学しながら往復するのは無理なので途中までロープウェイを使い、そこから上まで登り、あとは歩いて下りてきた。赤や黄色つばき白のアツモリ草を見つけ、皆大喜び。ここから九寨溝まで戻るのだが道路がひどく日本なら1時間で行くところを、つかまっていなと座席から放り出されるミニ

バスに乗って移動。皆気持ち悪くなり夕飯では食欲がなかった。

8日 九寨溝 九寨溝は、四川省の北部、南坪県の岷山山脈の標高3400mから2000m付近に位置している。手つかずの原生林の中に100あまりの湖、溪流、瀑布が50kmにもわたって連なっており、どこを見ても美しく、特に石灰岩に含まれるカルシウムの影響で白い鏡のようになった湖底に、澄んだ水が反射して、コバルトブルーにきらめく湖面は黄龍より素晴らしい。



九寨溝は、国が管理する保護区になっており、「九寨溝風景区」の入り口から入場し、専用のバスに乗り換える。構内は非常に広大なので、基本的にこの無料バスで湖沼地帯を移動。環境に配慮して、天然ガスで走るバスだとか。中国人のバスガイドが説明してくれるのだが全て中国語でちんぷんかんぷん。世界遺産なのだから英語で説明してくれてもと思ったが、中国系以外の観光客はほとんどいない。湖や大きな滝がたくさんあり遊歩道も整備されているので2日ぐら

いかけてゆっくりと回りたいところだが、中には宿泊施設がなく、入場料は以前は2日有効だったのが1日単位となったので1日で廻ることになる。

9日 九寨溝空港から成都へ戻り、都江堰、川劇

都江堰は、世界最古のダムと言われる古代の偉大な水利施設。岷江が山地から成都の平原に流れ込む位置に建設されている。都江堰ができる以前は、激流のためよく災害が起こったそうだが、2200年前の戦国時代に、秦国の蜀の太守、李冰とその息子が、先人の知恵を生かし、水利事業を行い、成都平原を「天府の国」と呼ばれるほど肥沃で物産豊富な地にし、今でも67ヘクタールの土地を潤しているのだそう。もちろんここも、世界遺産にも登録されていて、中国風の建物や公園を楽しんできた。黄龍、九寨溝はトイレも綺麗で使用するとビニールシートが中に巻き込まれるようになっていてよく出来ていたが、都江堰は入場料が安いせいかトイレは汚くて入る気がしなかった。

夜は錦江劇場、川劇がメインの「四川伝統芸能ショー」を見に行った。軽い気持ちで行ったがとても面白かった。絶対お勧め。ショーでは、様々な伝統芸能の見所を凝縮し、1時間半で7種類、観光客用に作られた演目なので、外国人が行っても楽しめる構成になっている。写真撮影もOK。川劇の一番の売り物、変面（お面を何枚も付けていてあっという

間にとり変える)を客席に下りて見せてくれ、1番前の席に座っていた我々に握手もして見せてくれたが、変面のからくりはとうとう分からなかった。

10日 成都からろ定 大地震の前なら成都から日隆へバスで1日なのだが、山道を通るため道路整備が地震の影響でまだ完成されておらず、政府は観光客を通さない。そのため迂回路を通り2日掛かって日隆へ入ることとなる。あとで分かったのだがヒマラヤ観光など特別のコネのある旅行会社はこの山道を通り、1日で行けるので行程を2日間短縮できる。

11日 ろ定から日隆へ 今回は4つの大きなピークからなる四姑娘山系(スークーニャン)の大姑娘山(タークーニャン5025m)の登頂を目指す。四姑娘山は四姉妹を意味し、長女の大姑娘山が一番低くどっしりとしていて、四女の大姑娘山がこの山系の最高峰で6250mあり鋭く気高くそびえている。四姑娘山の登頂は精鋭のクライマーが過去に数登した記録があるだけの大変難しい山だが、大姑娘山は一般登山者がトライできるお気軽5000m峰です。

12日 登山しようと思ったが、チベットとの紛争が道路が閉鎖され進めない。仕方がないので1日、日隆の村(3200m)で周辺の丘などをぶらぶらして過ごす。ここでようやく日本人登山ツアーやハイキングツアーの人達に遭遇する。

13日 いよいよ登山開始。登山許認



可やキャンプ、食料などの手配はすべて現地のエージェンツにまかせ。チベット人のガイドが付き、山々の眺めのよい尾根や谷をつめベースキャンプ(BC3700m)に向かう。荷物は馬が運んでくれる。登山道周辺は高山植物の宝庫でもあり、一面のお花畑です。エーデルワイス、シオガマ、トラノオ、サクラソウなどは踏み潰していかないと前に進めないほどで、日本では考えられない情景。さながら高原のハイキングといったところだが、標高は富士山山頂ほどもあり、酸素濃度は平地の2/3といったところ。ベースキャンプは海子溝という川のほとりにある快適な草原ですが一雨降ると湿原にはや変わり、グチャグチャになるそう。気温は昼は暑いくらいだが夜は防寒着が必要。

14日 いよいよアタック。2つ目のキャンプ、C1(4500m)を目指します。4300m付近で草もなくなりガレ場に入るとまもなくC1です。荒涼としたガレ場に幻といわれるブルーポピーや見たこともないような綺麗な花もたくさん咲いていて感激。



15 日 夜明けとともに頂上アタック開始です。稜線にあがると対面の景色が広がります。眼前に四姑娘山が鋭くそびえ、はるか遠くには横断山脈最高峰のミニヤコンカの頂を望むことができます。雪溪（アイゼンは不要でした）を渡り、

頂上直下のガレの急登をこなすといよいよ大姑娘山 5025m の山頂です。なぜか山頂の石には 5300m と書かれていますがこれはウソ、5025m というのもちょっと怪しい感じです。晴れれば 360 度の大展望ですが雨季なので花曇り。集合写真を撮ってお茶を飲みました。

下山はその日のうちに BC まで降りてしまい、翌日日隆へ。どうです？フルサポートの 5000m 峰登山、お気軽にしょ。

あとは成都でパンダ繁殖研究基地により、生まれて 1 日目のパンダの赤ちゃんや若いパンダたちが遊ぶ姿を飽きずに観察。皆楽しんで帰国できました。



私の趣味と今思うこと

濱田 和広

いわば完全な多趣味族です。小学生から中学生の頃は、友人と一緒に大阪湾で鰯、鯖、鰯等の海釣りを趣味としていました。また、この頃から盆栽で松や梅の木を少ない小遣で買ってきては、狭い自宅のベランダで育てていており、種苗会社の会員になって、檜、ブナ、松、楓等の種子を購入し、苗木を育てていました。年末のある日に、地元である泉佐野市の園芸店で五葉松の苗木を買い求め、自転車で帰路の途中に中学校の同級生に会い、からかわれたこともあります。高校

を卒業するまでは、年末の松竹梅の寄せ植えは、私が作っていました。

カメラを始めたのは中学二年生の頃から。叔父がカメラで京都や奈良のお寺を訪れて写真を撮影するのを趣味としていて、一眼レフカメラを買い換えたので、今まで使っていたカメラに F1.7 の標準レンズを新しく購入して私の誕生日にプレゼントしてくれました。その頃は、カラー写真は高価だったために、モノクロの 35mm のフィルムを購入して、奈良の斑鳩の里や山辺の道等の古里に

咲く梅や稲穂を撮っては、フィルム現像まで一人で楽しんでいました。また、高校生の頃は、狭い自宅の部屋に購入した引き伸ばし機を設置し、現像したモノクロフィルムを部屋を閉め切った暗室で、夏は汗を垂らしながら深夜まで印画紙に焼き付けていたこともありました。今は、デジタルカメラが普及し、撮影した写真をパソコンで加工して電子プリンターで印刷出来るから、このような面倒な作業は必要ありませんが、その時はそれですごく楽しかったですね。

友達がいなかった訳ではありませんが、同じような趣味を持った友人が近くにいなかったのも、もっぱらひとり旅。今の私の人生を形成した時期なのかもしれません。

会社に入社してから、しばらく板橋区のアパートに住んでいましたが、板橋区にある大原社会教育会館の陶芸の会に入会し、湯呑み、茶碗、一輪挿しの花瓶を轆轤で造り、自分で配合した釉薬を使ってみんなで焼いていました。例会は隔週の土日。朝9時から夜8時まで教室に引き籠もり、轆轤を引いたり、釉薬を作ったり、窯の当番をしたりしていました。轆轤で引いた作品は、乾燥するまで時間がかかるので、アパートで削りの作業を行っていたこともありました。造ったものは、自分で使うのは勿論のことですが、友人の結婚記念としてプレゼントしたり、バザーで売っていました。子供が生まれてから、脱会して今は活動していま

せんが、定年を迎えたら海が見える場所に自分の工房を作って、昼間は海釣り、夕方からは工房で焼き物を作ることが私の一つの夢です。

私の基本スタンスは、知らない場所を訪れて、景色や花を撮影し、地場の肴を食し、そこに住んでいる方と話をすることだと考えていて、今の仕事は私のスタンスを実現できる最高の贈り物だと考えています。

運動不足の解消と高山植物を撮影したり、山の頂からの写真を撮りたいと思っていた時に、仕事後の懇親会で大田会長とお話する機会があり、好山旅会に入会しました。若い頃は、会社の人達と富士登山や、年に二回計画している新潟の関係会社との合同登山に参加していましたが、もともとピクニック程度の山登りしか経験したことがなく当会の例会は、山登りが趣味の皆さんにとっては、初心者向きでも、私にとっては中級者以上の過酷なスケジュールに感じています。が、昨年の初秋に大田会長と会員の方4名で上った山は、体力がない私にとってはちょうど良いスケジュールです。かね。晩秋の紅葉が綺麗だから、11月頃に訪問しようと思ってはいましたが、結局は実現出来ませんでした。

昨年の参加回数は3回。忘年会を兼ねた例会に、忘年会だけの出席で1回とカウントして頂いたおかげですが、今年は少なくとも昨年以上の例会に出席させてもらおうと考えています。今は、職種

柄、休日午後からの移動が多いためと、趣味で始めた陸上競技の公式審判や小中学生の陸上競技の指導も同時進行で楽しんでいるためです。やはり、年間計画を立てて、山行に出席しないとかな

が難しいですね。

当会では若手の部類に入るのでしょか。落ち着いたら、会の運営にも協力していきたいとも考えています。今年も宜しくお願いします。

再録 百名山の岩石と成り立ち（１）「羅臼岳」

ペンネーム 蚤取眼
（高橋 和行）

<再録について>

創刊号より蚤取眼のペンネームで百名山の岩石と成り立ちを綴っています。ところが創刊号はナンバー（３）で、（１）や（２）は掲載されていません。これは会報「山旅」にそれらを掲載したので「山の談話室」では（３）からスタートと相成った次第です。

私が入会した頃の会報「山旅」は山行計画のほかにも盛りだくさんの記事が載っていて読むのが楽しみでした。

ホームページは存在せず会報紙は、山行計画書と一緒に郵送されて来ました。毎月、会からの郵便物が届くのが楽しみでした。この頃の会報係は、編集作業はもとより、会員から届く山行報告、投稿記事を入力する必要がある大変ご苦労されたことと思います。

ペンネームの蚤取眼は、まるで蚤を取る時のように拡大鏡で地形図を舐めまわすように見ることからつけました。

<ナンバー（１）再録>

最近、百名山を短期間に登山された人が報道されたように、百名山の登頂を目指す人が多い。私の友人にもいる。自分にはとりわけそのような指向は無いが、幾つかの山は登頂したことがある。百名山は、その山容が名山に値する姿や形をなすものが選ばれた理由であろうか、それはその山が特徴ある岩石やその成り立ちから生ずるものだろう。

知床半島の最高峰「羅臼岳」（1,661m）は、その百名山の一つである。登山口の木下小屋からは４時間半もかからずに登頂出来、恰好の日帰り登山ルートである。とは言え、往復では８時間以上かかり、陽の長い６月から８月までがシーズンである。頂上からは、オホーツク海も太平洋も眼下に広がり、遠く国後島を眺めることが出来る。

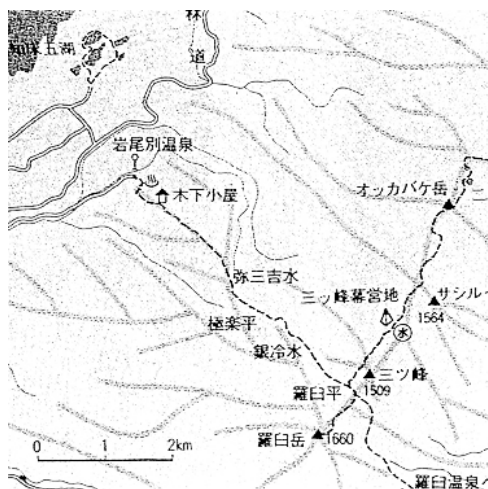
その羅臼岳は、学生時代に北海道の農家での１ヶ月のアルバイトを終え、その

得た金(ちなみに日給5百円)で北海道を旅した際に、知床半島を迂回する船賃を節約するため、羅臼町からウトロまで横断したときに、ついでに登頂したのが最初である。羅臼岳の魅力は羅臼平から見た威容にある。ハエ松が生えた窪地の羅臼平から眺めると、積木を積み上げたような姿で、岩が露出し、今にも崩れそうな直立した頂丘を成している。それは雲仙普賢岳の溶岩や昭和新山と同じ成り立ちで出来ており、粘っこいマグマが突き出し固まったもので、溶岩円頂丘と言う。

さて、木下小屋から紙上登山を行いながら、羅臼岳の成り立ちを見ることにする。木下小屋からオホーツク展望台までは尾根筋を急登する。足下の岩は羅臼岳の基礎を成すもので、山頂がタイ焼きの「あんこ」が固まったものとすれば、ここはタイ焼きの衣(ころも)である。それは小さな石が幾つも集まり固まったもので集塊(礫)岩である。オホーツク展望台ではっきりと観察出来、大月の岩殿山などの御坂山地の山々とよく似た成り立ちをしており、岩もそっくりである。

オホーツク展望台を過ぎると、黒っぽい泥の固まったような岩に変わる。泥岩である。さらに進むと、湧き水に出会う。木下小屋から1時間半ほどであろうか、湧き水は「弥三水」と言い、周りにはごつごつした大きめの岩があり、脆く、すぐに取り出せる。これは雲仙普賢岳の麓の

ように火砕流で運ばれた砕かれた溶岩で、水を透しやすく、水を透しにくい泥岩の上にあるため、多量の水を含んでいる。冷たく実にうまい。ここからしばらくは極楽平と呼ばれており、ハイキング気分で楽々な登りである。鳥の鳴き声に耳を傾け、足下の花に目をやるゆとりが出来た。極楽平では、小さな軽石質の砂が多く、植物にとって極楽な環境にある。その植物に昆虫が誘われ、鳥がその昆虫を狙ってやってくる。極楽平を過ぎると再び急登するも、また緩い所に出る。ほどなく「銀冷水」と呼ぶ湧き水に着き、ひと休み。ここ迄2時間半ほどである。この緩い谷筋は溶岩で出来ており、湧き水はその溶岩の中から湧いている。



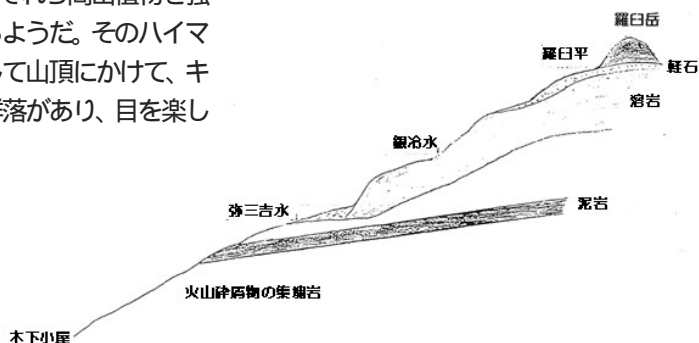
「銀冷水」を過ぎると、谷底には、あちらこちら残雪が現れる。残雪の残る谷筋をとときには横断し、ときには縦断し、ひとふんばりすると、羅臼平に着く。羅

臼平まで3時間半以上を経過している。この窪地で再びひと休み。この窪地はタイ焼きを曲げると衣が割れるが、その割れた窪みである。もう少し強く押すと中から「あんこ」が飛び出して来る。羅臼岳の頂上から三ツ峰や硫黄山の方角を見ると、頂上付近が窪んだ様子がよく分かる。この窪地は水が溜まりやすく、そのため土壌化も進み、高山植物が生え、お花畑を成している。なかでもハイマツの群落が多く、その中に小さな高山植物が生え、ハイマツはそれら高山植物を強い風から守っているようだ。そのハイマツをさけるようにして山頂にかけて、キバナシャクナゲの群落があり、目を楽し

ませてくれる。山頂まではあと一息である。ごつごつした岩肌を登ると漸く山頂に着く。

木下小屋を早くに発ったので、ちょうど昼時である。夏とは言え、さすがにオホーツク海から太平洋に抜ける風は冷たく、また強い。風を避けるようにして昼食を摂る。

帰りは雪渓を一気に下って行きたいところであるが、道に迷わないように。自分の反省から一言申して筆を置く。



新入会員 紹介

吉塚 トミさん 平成 22 年 11 月入会 紹介：ホームページ

動機：16 年前から健康のため登山。百名山完登。最近は静かな山歩きを好みます。

過去 1 年間の登山歴：年間 70 座ほど

それ以前の登山歴：百名山ほか 400 座ほど

高橋 淳子さん 平成 22 年 12 月入会 紹介：ホームページ

動機：山の写真を撮りたいと思い始めました。

過去 1 年間の登山歴：黒斑山、四阿山、燕岳、金時山、金峰山

長島 孝雄さん 平成 23 年 4 月入会 紹介：「山と溪谷」募集記事

動機：義兄が大学山岳部で、高校時代から登り始めました。山岳会で南アルプスのガイドブックを執筆している方と出会い、山にのめりこみました。

過去 1 年間の登山歴：会津駒ヶ岳、聖岳、光岳、室堂山、高尾山、城山、弁天山

それ以前の登山歴：南アルプス南部と深南部

木村 成雄さん 平成 23 年 4 月入会 紹介：ホームページ

動機：大学のワンダーフォーゲル部で 4 年間、国内の山を歩きました。昨年から単独で日帰りの山歩きを再開し、ライフワークとして百名山を目指すことを決意しました。

過去 1 年間の登山歴：羊蹄山、岩手山、日光白根山、至仏山、谷川岳、沼津アルプス、伊豆ヶ岳、武甲山～大持山、二子山～武川岳、棒ノ折山、蕨山、扇山、倉岳山、陣馬山、大山、高水三山

それ以前の登山歴：十勝岳～トムラウシ～旭岳、羅臼岳、利尻岳、八甲田山、朝日岳、飯豊山、西吾妻山、安達太良山、燧ヶ岳、会津駒ヶ岳、荒沢岳～平ヶ岳、巻機山、中ノ岳～越後駒ヶ岳、苗場山、大菩薩嶺、甲武信岳～金峰山、白馬岳、北岳、間ノ岳、仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、塩見岳、悪沢岳、槍ヶ岳、剣岳

編集後記

好山好山旅会の創立30周年を記念する「山の談話室」第20号をお届けします。原稿をお寄せいただいた皆様に感謝いたします。

当会が大阪の好山好会と姉妹関係にあることは皆さんご存じだと思います。好山好会長の徳永様の記事にあるように、秋葉勝市氏によって好山好会は設立されました。会長職にあった秋葉氏の東京転勤により、1980年(昭和55年)10月3日に好山好会東京支部設置が決定され、翌1981年1月1日に「好山好会東京支部」として発足し、本部を秋葉会長宅に置かれました。したがって、当会は今年の元旦に満30歳を迎えたことになります。

創立から6年後の1987年4月1日に「好山好会東京支部」を「好山好山旅会」に改称し秋葉氏を会長として大阪好山好会より独立しました。1989年4月1日に現相談役の高柳様が会長に、1993年4月1日に野口俊雄氏が会長となりました。その野口会長が2000年に三頭山にて行動中に82歳で逝去され、再び高柳様が会長に復帰されることとなりました。2009年4月1日には大田様に会長が継承され現在に至っています。

この30年間、リーダーや会報係、庶務係、募集係、会計係、会計監査係を会員がその任をそれぞれ分担し、活動が継続されてきた結果として現在の当会があると痛感する次第です。会の活動に貢献され退会されていった多くの先輩諸氏のたゆまぬ努力のおかげであることに改めて感謝の念を覚えます。

本号の発刊日にあたる6月5日に30周年行事として記念山行とささやかな宴が催されます。この記念行事の実施に当たっては、長らく当会でご活躍された先輩諸氏の方々にもお声を掛けさせていただきました。体力や健康面で参加が叶わなかった方が大勢おられましたが、参加していただいたOBの方も少なくありません。

記念行事にご参加いただいたOBの栗原様は、この「山の談話室」を創刊され、第17号まで編集・発刊をしていただきました。長い間ありがとうございます。第18号から私が引き継いでおりますが十分な務めを果たしていないことをお詫びいたします。

この30年の歩みに劣らぬよう、今後も当会が継続し活動を続け、ますます発展するよう願っています。

高橋 和行

バードウォッチング（ホームページ写真帳より）



コゲラ（ドロンゴさん撮影）



キレンジャク（ドロンゴさん撮影）



ベニマシコ（わくちゃん撮影）



ジョウビタキ（ドロンゴさん撮影）



エナガ（わくちゃん撮影）



モズ（わくちゃん撮影）



カワセミ（わくちゃん撮影）



ホオジロ（わくちゃん撮影）



山の談話室 第20号

発行日 平成23年6月5日

発行者 好山好山旅会 大田 雅巳

<http://www.kozanko.net/>

発行所 東京都江東区亀戸 6-22-8-401
大田方 好山好山旅会

編集 高橋 和行